

- * 「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」(ヨハネ12:27) これは、他の福音書で描かれているゲッセマネでの悲しみ、苦しみと祈りに該当するといえる。できれば、これから受ける十字架の苦しみを避けることができれば、という気持ちがイエスにもあった。一見弱音を吐いておられるようだが、これは人としてのイエスの恐れが表れている。イエスも私たちと同じ人間であったのだ。
- * しかし、イエスには、生まれた時から父なる神から与えられた大切な使命があった。その使命を果たす時が来たのだ。「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」という声が天から聞こえた。「御名の栄光をあらわす」とは実際には、十字架につくことである。その十字架によって世に対するさばきが行われる。イエスは支配者によってさばきを受け死刑になったが、十字架はそのさばいた人間をさばくものである。まさに逆転である。私たちもそのままだでは、イエスを十字架につけた者としてさばかれる。しかし、十字架が私の罪のためであることを信じれば、さばかれない。
- * 群衆は、イエスが「上げられる」すなわち十字架で死ぬと聞いて、人の子は死ぬはずがないと律法に書いてあるではないかと、言う。「人の子」は、ダニエル 7:13 の、「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。」からきている。キリスト(メシア)を表すことばである。
- * 「自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」
(ヨハネ12:35) 「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ1:4~5) 私たちは光を求める。闇の中にいるのは嫌である。まことの光は神、イエス・キリストしかない。キリストを信じて救われれば、光の子となることができる。闇の支配者であるサタンへの餌食になることもなく、罪が赦され、永遠のいのちの希望の中で生きることができる。